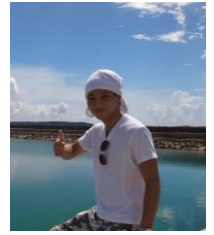


# 祭祀における村落空間の構成

## － 沖縄県大神島を事例として －

### Keywords

村落祭祀 離島 御嶽  
経年変化 信仰



AK13025 加藤 隼人

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景

世界には、様々な信仰や宗教がある。その信仰や宗教が、住居や村落の形成に強く関与する地域がある。その地域では当たり前のことが他の地域からみると特殊であり、逆もまた然りである。信仰や宗教は特徴的な空間を構成すると考えられるが現在は開発やグローバル化により衰退した独自の信仰や宗教も数多く存在する。

日本において、宗教的観念が居住空間に影響を及ぼす代表的な地域として、沖縄を挙げる。沖縄県は本土から遠く離れ、琉球文化に根ざした独自の宗教観念をもっている。沖縄の独自文化には、御嶽（ウタキ）と呼ばれる神が降りてくる場所、聖域が存在する。御嶽には普段から参拝することができる場所もあれば、その地域の人でも立ち入り禁止とされているところもある。また祭祀がおこなわれる儀礼小屋は、健康祈願、豊作祈願、大漁祈願、航海安全など、人々の生活に密接に関わる行事をおこなう宗教的空間である。沖縄県ではこのような御嶽や儀礼小屋などを中心として村落が形成されており、住民の生活にも影響を及ぼしている。沖縄県宮古群島は、信仰が未だ強く残っているが、宮古群島のなかでも、北部の狩俣地区、島尻地区、大神島の3地域では“ウヤガン祭”という秘儀的な村落祭祀がある。

### 1.2 研究目的

本土から離れた沖縄県の中でも、さらに離島である大神島についての研究は数えるほどしかない。またウヤガン祭について記されたものは2つしかなく、ウヤガン祭が住民の生活にどのように影響しているのか、村落構成とウヤガン祭との相互関係を研究した論文はない。

本研究では、空間と宗教的世界観とが密接な関係にあると捉え、宗教的世界観によって、居住空間が構成されていると考える。住民が大神島でどのようにウヤガン祭と関わり、生活をしているのか、ウヤガン祭がどのような位置づけで居住空間を構成しているのかを住居や村落の空間や社会組織に着目、調査し把握することを目的とする。また、秘儀的なウヤガン祭が今日でも存在する大神島で、人々が信仰と関わりながらどのような空間で暮らしているのか明らかにすることを目的とする。

### 1.3 研究方法

2016年8月5日から8月13日にわたり、沖縄県宮古島市大神島において、住居内および住居周辺の実測、村落全体の実測、各住居の住民への聞き取り調査を実施した。聞き取り調査では居住者の生活実態、間取りの変化、居室の使われ方、村落内での活動状況、村落祭祀の活動等を事前に作成したインタビューシートを中心に記録した。これらから得られた情報を中心に、住居、村落がどのような変遷を経ていったのか、また村落祭祀の影響をどのように受けているのか分析を進める。

### 1.4 既往研究

筆者が所属している清水研究室では、2011年より宮古群島の研究をおこない、これまでに来間島、狩俣地区、池間島、伊良部島の研究をおこなっている。宮古群島は御嶽を中心として村落が形成されているが、村落の特徴としておおまかに2パターンにわけられる。中心となる御嶽が1つである村落と、2つである村落に分類されるのである。池間島、伊良部島、狩俣地区は中心となる御嶽が1つであり、この御嶽を中心に村が広がっていたり、海側に御嶽が存在し、大きな道路で区切られ、そこから半円状に村落広がっていたりする。来間島は中心となる御嶽が2つ存在し、左右で男の神と女の神にわかれている。2つの御嶽の中間地点に井戸があり、その井戸も御嶽同様に信仰の対象となっている。また、この井戸を中心として村落が形成されている。大神島は、村落が南から島の中心にかけて一本道に集中しており、東西には大きな御嶽が存在する。島北部も人が入ることの出来ない聖域とされている。大神島も来間島同様、東西に御嶽が2つあり、その中間地点から村落が形成されていると考えられる。

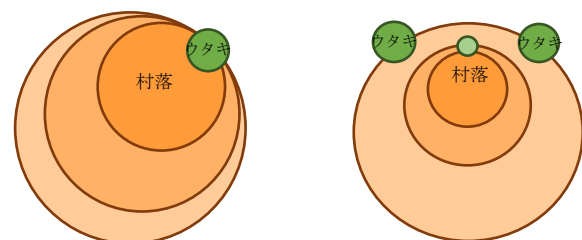


図1 宮古群島における村落空間のモデル

## 2. 調査地概要

### 2.1 社会経済状況

大神島は宮古島から北東に約4kmの場所に位置し、面積は0.24km<sup>2</sup>、周囲2.753kmである。人口28人、戸数15戸（2016年現在）の過疎地域で



図2 宮古群島

あり、住民の多くが60

歳以上の高齢者で構成されている超高齢社会でもある。ウヤガン祭を現在でも行っている唯一の島である。住居は、大神漁港がある島の南側から中心の遠見台にかけて緩やかな1本の坂道に集中している。宮古島本島とは対岸にある島尻部落から定期船が1日夏季は5往復、冬季は4往復しており、他は個人漁船が交通手段である。昭和8年に大神小中学校が設立されたが2006年に小学校閉鎖、2008年に中学校閉鎖、2011年に解体された。

### 2.2 大神島の特徴

大神島の中心は小高い丘になっており、遠くから見るとピラミッド型の島である。中心には遠見台があり、周囲を360°見渡すことができる。遠見台には神聖な岩と拝所があり、ウヤガン祭の際は、遠見台への立ち入りが禁止される。島には東側と西側に2つの御嶽が存在する。

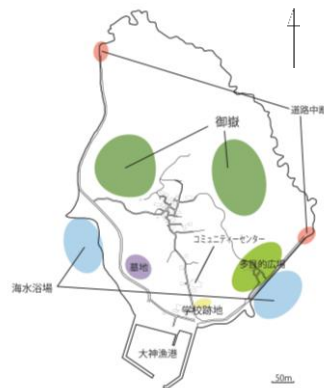


図3 大神島

東にある御嶽は通常立ち入ることが禁止されているが、年に1度住民だけが立ち入ることを許されている。西にある御嶽は、ウヤガン祭の際に神女が籠る「ターヌヤー」と呼ばれる儀礼小屋があり、容易に立ち入ることはできない。信仰の強い宮古群島の中でも、大神島は最も神聖な島と

いわれている。

## 3. ウヤガン祭

### 3.1 成り立ち

ウヤガン祭の大本は大神島である。かつて大神島は1人の神によって創られ、村落や住民も神が創ったといわれている。この大神島の神は母神であり、娘の神は島尻に、息子の神は狩俣へとそれぞれ別れた。島尻にいる娘の神は、祭祀中4足歩行動物の肉を食べてはいけないという掟を守っていたが、狩俣の息子の神はその掟を破り母神の怒りを買って、縁を切られた。そのため大神島のウヤガン祭には、島尻の神女しか参加できなくなったといわれている。ウヤガン祭はこの神に祈りを奉げることを目的とする。

神を自分の身体に憑依することのできる女性、また神と対話することができる女性のことを「ウヤガミ」と呼ぶ。ウヤガン祭は、大神島と宮古島の島尻地区、狩俣地区の3地域でおこなわれていたが、現在、島尻と狩俣ではウヤガミの後継者が現れず、島尻は1997年、狩俣は2001年に中止されている。大神島でも昔は9人ほど神女がいたが、現在は1人しかおらず、後継者が現れない限り大神島のウヤガン祭は中止となってしまう。西の御嶽には母神がおり、東の御嶽にはその配偶者の父神がいるとされる。この2つの御嶽の間には遠見台があり、ウヤガン祭のときはこの遠見台に神がおりてくるとされる。

### 3.2 内容

ウヤガン祭は、島尻地区、狩俣地区、大神島の3地域で行われていた豊作、豊漁祈願の祭祀である。ウヤガンとは祖神（オヤガミ）という意味で、ウヤガン祭はウヤガミの神女達が御嶽で山籠もりをする秘儀的な村落祭祀である。ウヤガン祭における御嶽での儀礼内容は神女達が把握しているだけで、村落外の人にはもちろんのこと、村落内部の人々や、家族にも話してはならないとされていたが、鎌田（1962）と川田（2009）により、徐々に内容が明らかになった。ウヤガン祭は旧暦6月から10月の5ヶ月間にかけて行われる祭祀であり、各月の新月の前後4~5日にかけて主に行う。鎌田によると、住民の先祖であるアカウレーという屋号の家から、神女が発することから祭祀が始まり、御嶽で祈願をしているあいだは熟睡することはなく、また食べ物もとらず、神女としか話さない。この際、外部の人間は穢れを持っているとされ、神と同等とされるウヤガミに近づくと穢れが移るといわれている。このため、ウヤガン祭を外部の人間が見ることは禁忌とされ、ウヤガミが島を出ることも良いこととされない。ウヤガン祭期間中は島内の立ち入り禁止区域が設定されたり、大神島ツアーの変更をおこなない、村落内部に部外者が立ち入らないようにされている。

## 4. 住居空間

### 4.1 間取り

住居空間に関しては3件の住宅調査を基に、宗教的観念との関係を分析する。図面は、平面図（1/50）、外構図（1/80）を作成した。昭和34年のサラ台風により、大神島の住居はほぼ壊滅してしまった。それまで全ての住居が木造だったが、改修工事をおこなう際にRC造に改築する住居が多かった。

住居は沖縄ではよくみられる東の部屋から、一番座（客間）、二番座（仏間）、三番座（居間）、そして台所で構成されている。西側に台所などの水回りが配置されている。住居の向きはすべて入口が南向きであった。これは村落の立地が南向き斜面であることと、南風を居住空間内に取り込みやすいこと、また先祖の神が南からくると言われていることが関係している。築年数により、

玄関をもたない家、トイレが別棟にある家、現在も土間を活用している家など様々であった。

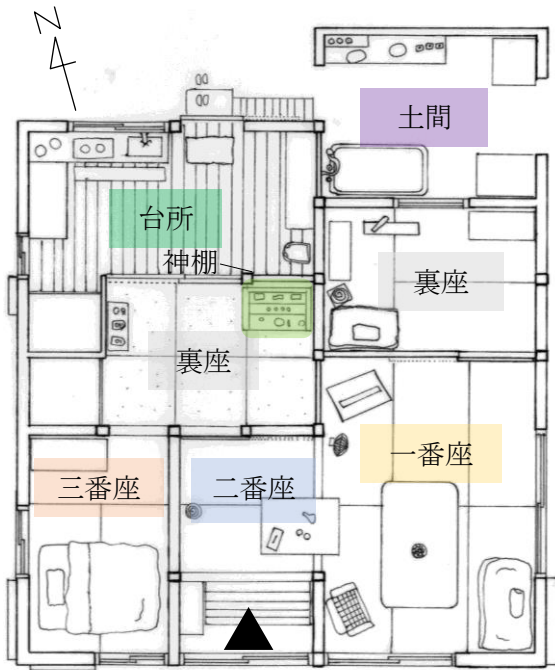


図4 No.20住居平面図

## 4.2 生活

住人は自分の子どもたちからの仕送りや、年金でゆくりと過ごしている。住居は建ててから長い年月が経っているが、現状に不満を抱えていない。そのため、リフォームや修繕などは考えていない。大神島を出て他の地域で過ごしたいという人はおらず、車など気にしなくていい、のんびり暮らしたいなどといった離島特有の良さがあった。住人は高齢者が多いため、1日を家の中で過ごすことが多い。その中でも一番座で過ごすことが多く、そのまま一番座で就寝する。就寝時、枕は東の方角に持つてくることもわかった。これは東方崇拜に関わる。「太陽は東から昇る」＝「神は東からくる」、また「魂の源」という考えに基づいて東方向を崇拜し、主要な部屋とされる一番座などが東側に配置されている。

エアコンなどがいないため、常に開口部を開けていることも共通している。住民同士は小さいころから島で育ってきたためプライバシーやセキュリティーの不安はない。

## 4.3 神棚

神棚は仏像や位牌を安置し、亡くなった親族を家の中で礼拝するためのものである。大神島の住居では二番座、または二番裏座に置かれていた。その中でも神棚はなるべく住居の中心に配置されている。日常的に先祖に祈る行為がウヤガンに密を感じるきっかけになっている。

## 4.4現状

インタビューと実測の結果、大神島から出て、別の場所に住んだことがあるかないかで住居空間に変容がみられることがわかった。一度大神島を離れて生活を経験していると、外部との関わりや利便性を求めるようになる。例えば、母親の看病のため宮古島から帰ってきて、その後同じく宮古島から大神島に帰ってきた、食堂店主と過ごす時間が多かった住民がいる。そうした人々は大神島の観光化にも協力的であり、観光ガイドを務めることも多い。一方で、長年大神島で暮らしている住民は観光化よりも、島の言い伝え、ウヤガミを崇拝する考えを尊重することが多い。ウヤガミの後継者不足によるウヤガン祭の存続については、神が決めることなので何も言えない、どうしようもないという意見が多かった。

## 5. 村落空間

### 5.1 屋号

大神島には屋号がある。屋号とはもともと江戸時代に身分制度により武士以外の人々が苗字を名乗ることが認められていなかったため、人口が増加するにつれ同地域内で同じ名を持つ者が増えていき、個人を特定・判別しにくくなったところから生まれた。古くからの地域や特定の集まりに根付いた家は、集落内における家の特徴から屋号がつけられる。地域によっては苗字に代わるものとしても用いられたため、一家族、一族の系統を示すものとしても用いられている。農漁村では、家の地位・立地・特徴などを屋号としているため、屋号は多種多様である。沖縄県においては同じ姓を名乗る者が多いことや、地縁・血縁を重んじる傾向にあるため、現在も姓とは別に屋号を持っているケースが多い。

大神島では代々ウヤガミを多く輩出してきたウヤガミ筋の住居が村落の上部に配置されている。大切なもの、崇拝しているものは後方や上のほうに配置する背後上位が関係している。

### 5.2 村落の聖地変動



図5 立ち入り禁止エリア分布



村落周辺は、ウヤガン祭期間中になると部外者は入れなくなる。大神島観光ツアーなどもルートを変更しておこなわれる。ウヤガン祭が始まると途端に島の外周部分しか立ち入ることができない。少子高齢化が進み観光化をおこない、島を発展させようとしている住民もいるが、現在も多くの住民は伝統を引き継ぎ、ウヤガミへの信仰を持っているのである。図5に示す通り、通常時とウヤガン祭時では聖地となるエリアが変化する。ウヤガン祭では島の半分以上の場所が立ち入り禁止となる。

### 5.3 村落空間の変化

島一周道路や海水浴場の設置など行政が島の観光化や整備をおこなっているが、長年住居の配置は変わっておらず、村落の上層にウヤガミを輩出する家元や、大神島の先祖である家など、ウヤガン祭と強く結びついている住居が配置されている。一方、島の南にある大神漁港では食堂があったり、シュノーケルツアーがおこなわれているなど観光化がみられる。

## 6. 考察

### 6.1 共通認識としての宗教

これまでの記述から、大神島は神の存在によって空間が組織されていると言える。村落で語り継がれるウヤガンの存在は村落構成に現れ、現実的な空間に神の存在を反映させている。住民たちは神の存在を共通に認識しており、島の空間に影響し、大神島という独特の地域をつくりあげている。神の存在を中心に生活することで村落に一体感がうまれる。グローバル化、観光化をすすめ便利な生活することと、宗教を重んじ、伝統的な祭祀、しきたりを守り信仰を保つことは同等に理想的である。

もう一つの共通認識として、大神島がかつて二人だけになり、その二人から再生したというルーツをもっている。こうした神話的エピソードから、現在の住民はすべて家族であるといえる。そのため島にはパブリックとプライベートを分け隔てるという考えがない。戸をあげ放ち生活することで他の住民との交流も絶え間なくおこなうことができる。3年前にできた食堂は住民のほとんどが活用しておらず、道路の縁などに座り会話してるなど、最近できた人工的な空間よりも、長い年月をかけ、自然に出来上がった共有空間を活用している。離島という閉鎖的空間ではあるが、人口減少が進んでいる現在でも孤独に暮らすというイメージはない。

### 6.2 閼

山本理顕の「閼」という概念を大神島に当てはめて考察する。閼とは二つの相互に異なる空間の間にあり、その二つの空間を互いに切断、あるいは接続する空間的な装置、また相互の空間の性格を変質させない空間措置のこととされる。

大神島は港のある「海岸側の日常的空間」=いわゆる「俗域」と、「御嶽（聖地）」という非日常的空間「=

「聖域」を持つが、立入禁止とされる聖域は祭祀により変化する。住民を一つの家族と考えると村落が閼となり、海岸以北と御嶽との間に存在する空間となる。住民の共通認識として、御嶽への自由な出入りは禁止とされているため、全員で信仰を守っているということになる。

図6のように儀礼のおこなわれていない時期は、海岸以北と村落は俗域である。この時、村落は海岸以北の空間と接続し公的空間となる。儀礼がおこなわれる際には、この空間構成が変化する。俗域に属していた村落空間が御嶽同様聖域に属する。村落が海岸以北と御嶽とを互いに接続、あるいは分断して閼として上手く機能している。つまり空間の振り分けが儀礼に応じて変化するのである。

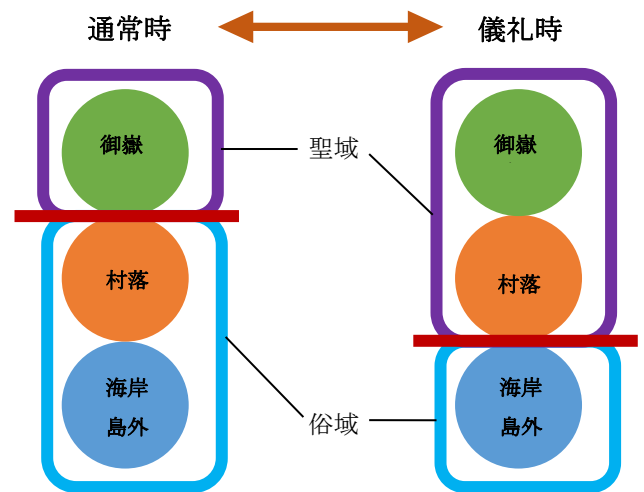


図6 大神島における閼空間のモデル

## 7. おわりに

近年、大神島のような信仰を中心として生活をおくっている地域が少なくなっている。だが、本来村落というものには住民の意志が現れる。人の一生より長く、遙か昔から遠い未来までそこに存在し続ける。村落社会が住民の意思を引き継ぎ、記憶装置を持った空間となる。筆者は、このような人口減少に影響を受けず、共通認識を持ち信仰を尊重している地域が後世に残ることを願う。

### 参考文献

- 1) 岡本恵昭「宮古島の祖神祭・狩俣・島尻を中心として」まつり同好会 1971
- 2) 川田桂「沖縄宮古島のウヤガン信仰-大神島を中心に」名古屋大学大学院 比較人文学研究室 2009
- 3) 鎌田久子「大神島の祭祀組織と年中行事」民族学研究 / 日本民族学会 編 1962
- 4) 奥浜幸子『神の島—大神島』ニライ社 1997
- 6) 三上智恵 「大神島における祭祀組織のシャーマニズム的研究 - 神に選ばれられる女性神役・ウヤガン -」 沖縄国際大学大学院 2004
- 7) 比嘉康雄『神々の古層3巻 - 遊行する祖霊神 ウヤガン 宮古島 -』ニライ社 1991